

Jennie Batchelor and Cora Kaplan (eds.):
*British Women's Writing in the Long
 Eighteenth Century: Authorship, Politics
 and History*

New York: Palgrave Macmillan, 2005. 193 pp.

川津雅江

イングランド南部ハンプシャー州チョートン村にある「チョートン・ハウス図書館・研究センター」は、ジェイン・オースティンの兄エドワードがかつて住んでいたマナーハウスを改修した建物内に、1600年から1830年までの女性作家たちの著作物を（ポドリー図書館や英国図書館にもない稀覯書を含め）他に類のないほど数多く所蔵し、初期イギリス女性作家研究の中心地としての役割を誇る。2003年6月、この私立図書館の開館を祝う国際学会（“Women's Writings in Britain 1660-1830”）が開催された。『長い18世紀のイギリス女性たちの著作』はその学会から生まれた18世紀女性作家研究論集である。

本書の最後を飾る Isobel Grundy, “Chawton House: Gathering Old Books for a New Library”によれば、チョートン・ハウス図書館の方針は、クララ・リーヴが『ロマンスの進展』（1785）でなしたように、初期イギリス女性作家たちを「周縁ではなく中心」（183）におくことである。同様に、本書も女性の著作を文学や印刷文化の「中心」におくことを総意とし、新しく刺激的な18世紀研究を提示することを目的にしている。

従来の女性作家研究は大雑把に言って、1970年代から1980年代はじめのフェミニズムによる政治的傾向の読みから、1980年代後期に印刷文化研究へ

と広がり、それとともにセクシュアリティ研究、コロニアル研究やポストコロニアル研究の台頭、そしてさらに女性による文学・文化生産への参加などについて考察する歴史学的アプローチへと進んできた。その間の研究動向でとりわけ注目に値するのは、公共圏と女性との関係についての見解の推移である。ユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』（ドイツ語初版 1962 年、英訳 1989 年）が公共圏という概念を持ちだして以来、歴史家やフェミニズム理論家たちは「公」と「私」の領域の区別をそれぞれ男性と女性の区別に相当する分離領域のイデオロギーとして解釈してきた。しかしながら、昨今では、女性が公共圏にいかに関与したかに焦点をあてる研究が出現している。たとえば、Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837* (1994) の第 6 章, Hannah Barker and Elaine Chalus, eds., *Gender in Eighteenth-Century England: Roles, Representations and Responsibilities* (1997), Kathryn Gleadle and Sarah Richardson, eds., *The Power of the Petticoat: Women in British Politics, 1760-1860* (2000) などは、女性が必ずしも政治的に公共圏から排除されていないことを論じ、John Brewer, "This, That and the Other: Public, Social and Private in the Seventeenth and Eighteenth Centuries," in *Shifting the Boundaries — Transformation of the Languages of Public and Private in the Eighteenth Century*, ed. Dario Castiglione and Lesley Sharpe (1995) は、「公」と「私」の二分法を疑問視し、両領域の連続性に注目する。また、Elizabeth Eger, et al. eds., *Women, Writing and the Public Sphere, 1700-1800* (2001), E. J. Clery, et al. eds., *Authorship, Commerce and the Public: Scenes of Writing 1750-1850* (2002) などは、当時の女性たちが小説や雑誌の投稿詩や書評などさまざまな分野の著者や読者として、文学市場、印刷文化、消費社会などの公共圏に関与したあり方を明らかにしている。本書はまさにこの流れを継ぐものである。全体の構成は、第 1 部「著述業と印刷文化」と第 2 部「歴史と政治学」からなる。

第 1 部第 1 章 Jennie Batchelor, "Woman's Work: Labour, Gender and Authorship in the Novels of Sarah Scott" は、女性が慈善という著述業の形で公共圏に関与した一つの事例を提示する。文学市場の拡大とパトロン制度の衰退に伴って職業作家が増大した 18 世紀後期に、セーラ・スコットは女性の著述業を小説の中のヒロインたちの労働と同一視したが、女性の労働を金のためでは

ない単なる「慈善」活動として見なし、また著者としての自分を「読者を道徳的に後援する者」(27)として思い描いたのである。第2章の Norma Clarke, “Anna Seward: Swan, Duckling or Goose?” は、18世紀末期の詩人アンナ・シーワードに焦点を当てる。シーワードは「リッチフィールドの白鳥」の異名をとったが、クラークによれば、才能はあるが何かに欠ける「醜いアヒルの子」でもあり、後世の評価では「ガチョウ」(あほう、まぬけ)だった。クラークは、シーワードが『ジェントルマン・マガジン』上でおこなったジェームズ・ボズウェルとの論争によって批評家としての地位を確立し、当時の印刷文化の中心にいたにもかかわらず、ボズウェルに矮小化された結果後世に「ガチョウ」という低い評価がもたらされたことを指摘する。第3章の Katie Halsey, “Spectral Texts in *Mansfield Park*” は、従来エリザベス・インチボールドの急進的な劇『恋人たちの誓い』との相互テキスト性が指摘されている『マンズフィールド・パーク』において、ヒロインの生き方の道徳的規範としてウィリアム・クーバーの『課題』やジョージ・クラブの『物語』(これらをホールジーは「幽霊テキスト」と呼ぶ)が引喩されていることに注目し、同小説が急進的か保守的かどちらか一方の側の道徳的イデオロギーを示すのではなく、双方の価値の戦場になっていると論じる。第4章の Judith Hawley, “Romantic Patronage: Mary Robinson and Coleridge Revisited” は、18世紀末期の『モーニング・ポスト』紙の詩のコラムに共に投稿していたメアリ・ロビンソンとサミュエル・テラー・コウルリッジの関係に焦点をあて、当時自分よりも遙かに有名な詩人であったロビンソンに対し、コウルリッジがいかに「恋愛的なパトロン」として彼女のスキャンダルに満ちた過去から詩人としての彼女を守ろうとしたかを明らかにする。第5章の Janet Todd, “Ivory Miniatures and the Art of Jane Austen” は、オースティンの小説が小さいスケールと模倣的リアリズムの点で当時大流行していた象牙の細密画に相似していることに注目し、オースティンが19世紀末以降よく言われるような壮大な「歴史家」ではなく、実は女らしい「細密画家」的作家であったことを明らかにする。第6章の Brian Southam, “*Mansfield Park* — What did Jane Austen Really Write? — The Texts of 1814 and 1816” は、『マンズフィールド・パーク』の二つの版のテキストの違いに注目し、作家と印刷業者と編集者

たちがテキストを生産する際に果たした役割の複雑さを指摘する。結局、オーステインが実際何を書いたかは永久に謎のままである。

以上の第1部が書く主体としての女性作家たちを主に文学市場や印刷文化の側面から考察したに対し、第2部は、女性作家たちが18世紀の歴史的、政治的、哲学的論争にいかに関与しているかをさまざまな視点から明らかにしている。第7章のHelen Thompson, “Thou monarch of my Panting Soul: Hobbesian Obligation and the Durability of Romance in Aphra Behn’s *Love-Letters*” は、アフラ・ベーンの『恋文』(1685-87)を小説としてだけではなく政治哲学書としても読むべきだと主張する。『恋文』はトーマス・ホブズの政治理論の失敗を描くことによって、物語の真実とトーリー党的忠義を対応させているのである。第8章のFelicity A. Nussbaum, “British Women Write the East after 1750: Revisiting a ‘Feminine’ Orient” は、18世紀の旅行記に対する従来の見方——東洋の女性化、西洋女性の鏡像としての東洋女性像、妻の殉死のような未開の印など——を修正するために、三人の女性(Elizabeth March, Jemima Kindersley, Eliza Fay)による東洋旅行記を取り上げ、それらのテキストにおける「異人種間の結婚、キリスト教への改宗、そして文化移植」(123)のような東洋と西洋の混成物の特徴を探る。第9章のMoi Rickman, “Tied To Their Species By The Strongest Of All Relations: Mary Wollstonecraft and the Rewriting of Race as Sensibility” は、『アナリティカル・レビュー』におけるメアリ・ウルストンクラフトによるSamuel Stanhope Smith, *An Essay on the Causes of the Variety of Complexion and Figure in the Human Species* (1787)の書評を取り上げる。人種についての議論において、ウルストンクラフトはスミスの一祖発生説に賛同したが、彼のラーヴァーター的人相学による人種の違いの見解を退けた。ウルストンクラフトの考えでは、すべての人には他者に対する共感のような感受性が内在的に備わっており、その意味で人種に違いがないからである。第10章のHarriet Guest, “Hannah More and Conservative Feminism” は、ウルストンクラフトやバーボウルトのような急進的なフェミニストたちと比較しながら、ハンナ・モアを保守的フェミニストとして再評価する。ゲストによれば、モアは女性が慈善や博愛という女性的・家庭的行為を通して女性の立場を改善するやり方で公共圏に参加することを示し

た。最後に、第 11 章のグランディの論文は、チョートン・ハウス図書館の性質と価値と目的を述べている。

近年は日本においても、18 世紀の女性作家の作品に触れることがきわめて容易になってきた。ブロードビュー、ペンギン、オックスフォードのワールド・クラシックスなどによって陸続と女性作家の作品が再版されている。それに加えて、ブラウン大学の *Women Writers Project*, チョートン・ハウス図書館の *Novels Online*, カナダのアルバータ大学の *Orland Project* などによって女性作家の電子テキストや経歴、当時の批評などがオンライン上で公開されている。また、*Eighteenth Century Collection Online* を利用できる日本の大学もある。これらのデータベースは主として *The English Short Title Catalogue* (1473 年～1801 年にかけて刊行された図書(印刷本)、雑誌、新聞、パンフレット、広告などを 46 万以上収録している目録) に拠るものである。現在では *ESTC* も英国図書館のウェブで検索可能である。このように極東のわれわれも 18 世紀イギリス女性作家を研究するのに欧米と何ら変わらない研究環境にある。だが、これらのデータベースをちょっと覗いただけでも 18 世紀の女性の刊行物の多さに圧倒されるのに、本書は刊行物だけでなく、*ESTC* ですら看過してきた雑誌や新聞紙上に女性が書いたものにも批評の対象を拡げている。本書の序文を書いた Jennie Batchelor と Cora Kaplan が述べているように、おそらくこれからの 18 世紀女性作家研究は女性のあらゆる書き物(印刷された書籍や記事・コラムだけでなく、手書き原稿や未刊行物、日記、書簡などを含む)を考察の対象にする方向に進むであろう。そうなった場合、われわれはもはやプロとアマチュアの序列的な二分法に囚われるべきではない。しかし同時に、読まねばならぬ女性の書き物の高い山を前にして吐息をつくだらう。本論文集は 18 世紀女性作家研究の底なしの可能性と困難さをかいま見せてくれる。